

平成21年5月29日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19760443
 研究課題名（和文） 近代サハリンにおける社会変動と市街地変容（ユジノ・サハリンスクを中心に）
 研究課題名（英文） Social Change and Urban Space Transfiguration in Modern Sakhalin
 (Iuzhno-Sakhalinsk Mainly)
 研究代表者
 井潤 裕 (ITANI HIROSHI)
 北海道大学・スラブ研究センター・COE共同研究員
 研究者番号：10419210

研究成果の概要：

本研究では、ユジノサハリンスクの市街地変容の特性として、日本時代初期に建設された豊原市街地の城下町的特質について、同様の性質を持つ札幌の初期市街地との比較に基づいて、その変容過程の違いを明らかにした。札幌ではすぐに消失した城下町的特質が豊原においては日本植民地時代の終焉まで維持されていたこと、それが豊原を接収したソ連軍幹部に「住宅の階級的格差」として報告されていたことなどを明らかにした。またサハリンにおける住宅建築およびマイクロライオンの建設事業については、1960年代と80年代で大きな格差が認められる。集合住宅の大規模化とともに、建築の質的低下と共用オープンスペースの形骸化、コミュニティの分断下が顕著に認められる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：建築史・意匠・都市計画・サハリン史・日ロ関係史・ソビエト連邦史

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となるユジノ・サハリンスクは、1881年に流刑地時代のサハリンにおいて開拓集落の一つとして開基されたウラジミ

ロフカをその端緒としている。1905年に南サハリンが割譲されてから、この地は豊原として日本の樺太経営の中心拠点として整備さ

れ、以降政治的経済的な中心として成長を遂げてきた。1945年に終焉を迎えた第二次世界大戦以降は、ユジノ・サハリンスクとしてソ連極東地域の拠点市街地の一つとなり、現在に至っている。発祥からおよそ120年という比較的若い都市ではあるが、その間に二度の住民交替を経験し、日ロ両者が地域拠点として計画的な建設活動を続けてきたという特殊性を有する都市である。日本統治期における都市建設は、北海道の土地区画制度をほぼ踏襲した形で始められたことや、豊原が「小札幌」と呼ばれ、むしろ近世的な都市構造を有する市街地であったことはすでに論じてきた。対して、これを継承したユジノ・サハリンスクでは、マイクロ・ライオンを基本単位としたやや大きめの住区規模に基づくソ連型の市街地建設が進められていたことが見て取れるものの、その具体的な展開プロセスや計画理念には不明瞭な点も多く、極東地域の他の市街地と比較しても、明らかに特異な構造を有している。

申請者は1996年からサハリンにおける日本期建造物と建設活動における研究に従事しており、官庁建築や産業施設群をはじめとする主要建築の歴史的背景や現況に関する研究を中心に、サハリン州公文書館における日本語文書群1500件に関する資料調査、現存日本期建造物を対象とした建築実測調査などを手がけてきた。また都市史的な分野においても、市街地形成過程を中心として、ユジノ・サハリンスクやコルサコフの都市史に関しても研究活動を展開してきた。特に、ユジノ・サハリンスクについてはウラジミロフカから豊原へ至る社会変動期の市街地形成過程についてはすでに一定の成果を挙げている。

日本におけるサハリン研究は、帝政期は極東ロシア史、日本統治期は日本近代植民地史

という形で分断しており、それぞれ共時的な視野での研究はなされているものの、通時的な連続性をふまえて地域の歴史変遷を理解するという視座が見られない。加えて、樺太以降の歴史についてはほとんど研究成果があがっていない。しかしながら、ウラジミロフカ、豊原、ユジノ・サハリンスクを連続的に眺める視点に必要性を痛感してきた。

2. 研究の目的

本研究は、ユジノ・サハリンスク（旧豊原）市を対象として、その市街地変遷の歴史的特質を明らかにし、かつ北海道とロシア極東における主要市街地との歴史的構造的景観的側面からの比較検討を通して、日ロ双方の都市認識や空間秩序のあり方を考察する一助とすることを目的としている。同時に、ウラジミロフカから豊原を経てユジノ・サハリンスクに至る都市化のプロセスを連続的に捉えることにより、サハリン・樺太史の通時的理解の礎石たることも目指している。

具体的な研究テーマは以下の3点である。

(1) 近代サハリンの社会変動とユジノ・サハリンスクの市街地変容（日ソ交代期を中心に）、(2) 北海道・サハリン・ロシア極東における主要市街地の構造的景観的特質の比較検討、(3) ロシアの中の日本建築と日本の中のロシア建築。

なお、本研究は通時的な視野における近代サハリンの社会変動に関する研究と、北東アジア地域における都市文化の相互影響に関する研究という二つの中長期的研究構想の一環をなすものである。

3. 研究の方法

(1) 近代サハリンの社会変動とユジノ・サハリンスクの市街地変容（日ソ交代期を中心に）、

日ソ交替期の社会変動についてはほとんど実態の把握がなされていないため、まずその

あらましを明らかにする必要がある。これについては、国立サハリン州公文書館（Γ A C O）などに所蔵されたサハリン州共産党関連文書などにより、ソ連側行政当局の政策的立脚点などを確認するとともに、引揚者の手記や口頭証言なども参照して、その把握に努めたい。

これと並行して国立サハリン州公文書館において州行政府都市建設局関連文書などにあたることで、具体的な市街地改変事業の実施過程を追って行く。また、サハリン州郷土博物館などに協力を依頼し、ユジノ・サハリンスクの都市建設に関わる映像資料・図版・写真などを積極的に収集して、視覚的な側面からの市街地の変貌についても調査検討を進めたい。

(2) 北海道・サハリン・ロシア極東における主要市街地の構造的景観的特質の比較検討

比較対象としては、北海道においては札幌市・旭川市・帯広市などの内陸部における地域拠点を、ロシア極東においてはウラジオストク・ブラゴベシチェンスク・ハバロフスクなど、都市史において既往研究のある地方中核都市を考えている。

北海道の市街地形成に関しては、申請者の在籍していた北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻建築計画学講座建築史意匠学研究室に充実した研究成果の蓄積がある。また、ロシア極東においても戸沼幸市・佐藤洋一（早稲田大学理工学部建築学科）らを中心とした研究成果が存在する。本研究ではこうした研究報告を市街地形成過程という観点から検証しつつ、その成果を積極的に援用し、さらに実地調査により新たな知見を加えることで、歴史的構造的景観の側面からユジノ・サハリンスクとの比較検討を試みる。

具体的には、中心市街地の変遷や市街地の

拡張過程のほか、主要街区の町並みやビスタラインといった景観的アプローチに加え、周辺地域と境界性の変容に焦点を当てた形での現地調査を検討している。

(3) ロシアの中の日本建築と日本の中のロシア建築。

日本期建造物の現存状況については、申請者の在籍していた北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻建築計画学講座建築史意匠学分野研究室において、継続的な研究が続けられてきた。その成果は「南サハリンにおける日本統治期（1905-45）の建造物に関する広域実態調査」（平成 12～14 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 課題番号：12572027）などさまざまな形で報告されている。これらによりサハリン州内には樺太庁官舎や王子製紙社宅群を中心に、今尚多くの日本期住宅が現存し、居住されていることは判明している。ロシアの中の日本建築という観点からは、サハリン州内に存在する日本期の住宅建築がどのような形で改変を加えられて利用されているのかをより具体的に調査し、そこから伺えるロシア人の日本住宅に対する性能評価や空間秩序の変容を明らかにしたい。

また、樺太庁がロシア式の伝統的な木造住宅を耐寒性の優れた樺太向けの住宅として高く評価し、住民に終始励行していたにもかかわらず、実施レベルの段階では全くといってよいほど利用されていなかったこともすでに明らかであるが、日本の中のロシア建築という観点から、樺太と呼ばれた日本期において、過去の建築遺産であった帝政ロシア期の住宅建築がどのように利用されていたかに焦点を当て、樺太日日新聞など当時の文献資料からロシア式住宅に関わる言説を抽出することで、日本人のロシア住宅に対す

る性能評価や両者の空間秩序の差異性などを改めて検討したい。

4. 研究成果

極東地域全体との住宅建設活動面からの比較考察や、マイクロライオン単位での市街地構造の特質の分析、建設活動において中心的な役割を果たしたOAOサハリングラジュダンプロジェクトの活動の歴史的側面などを解明した。

日本期建造物の現存状況に関する全容把握がサハリン州ではなかれておらず、重要な歴史的建造物が集中するユジノサハリンスク北部の旧豊原氏が一界限においても、日本期建造物に対するサインボードやパンフレットなど広告活動が不足しており、また景観保全に関する市民の関心を惹起するような施策の面でも課題が多いことを指摘した。市街地変容過程の中で旧体制下における物質的遺産の活用と保護にあたり、日本での施策や成果を参照しつつ総合的かつ長期的な保存計画を立案する上で、そのフレームワークを提出し得た。

サハリンにおける住宅建築およびマイクロライオンの建設事業については、1960年代と80年代で大きな格差が認められる。集合住宅の大規模化とともに、建築の質的低下と共用オープンスペースの形骸化、コミュニティの分断下が顕著に認められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

①井潤 裕「日本期の歴史的遺産 —保護対象・制度・意義と価値—」の報告意義」(サハリン・樺太史研究会)、2008年12月26日、

北海道大学

②井潤 裕:「日本期の歴史的遺産 —保護対象・制度・意義と価値—」(「樺太時代の史跡保存に関するシンポジウム」)2008年11月6日、ユジノサハリンスク市立美術館

③井潤 裕:城下町としての豊原:豊原は小札幌だったのか?(日露国際セミナーシンポジウム「サハリン:植民地化の歴史的な経験」)2008年5月6日、サハリン総合大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井潤 裕 (ITANI HIROSHI)
北海道大学・スラブ研究センター・
COE共同研究員
研究者番号:10419210

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし